




明石市コミュニティ・スクールだより
 人をつなぎ 未来をつなぐ 明石のコミュニティ・スクール

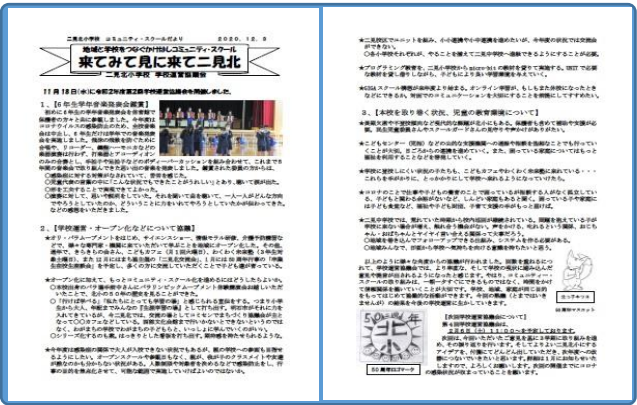
コミコミスクスク

KOMIKOMISUKUSUKU
 明石市教育委員会事務局学校教育課



コミコミスク TwitterQR

「来てみて見に来て二見北」12月号が届きました



11月18日に開催された二見北小学校学校運営協議会の内容を校区の皆さんに広く伝える二見北小学校コミュニティ・スクールだより「来てみて見に来て二見北」が二見北小学校から届きました。

今回の学校運営協議会では委員の方々が「6年生学年音楽発表会」を6年生の保護者のみなさん一緒に観賞することから始まったようです。コロナ禍の中で各校が行事の

持ち方に苦労し、工夫される中で二見北小学校では今年度の全校音楽会は中止の決断をされたようです。その中で、6年生は飛沫の飛散防止策を工夫し、打楽器とアコーディオンに、手拍子や足拍子などのボディーパーカッションを組み合わせ、これまで5年間の音楽会で取り組んできた思い出の音楽を発表する「6年生学年音楽発表会」を計画されたようです。こうした行事の持ち方を学校運営協議会に提案されたことは、今後の学校のデザインを学校運営協議会で熟議する上で大きな参考になるんだろうなと思いました。

また、今後の音楽会の持ち方として、こうした学年ごとの取組をメリット・デメリットを考えながら学校・保護者・地域そして子どもと一緒に考えてみる価値はあるのではと思いました。

また、現在二見北コミュニティ・スクールでは、サイエンスショー、情報モラル研修、介護予防講習などで、様々な専門家・機関に来ていただいて学ぶ場を保護者や地域の皆さんが子どもたちと一緒に学ぶ場として地域に開かれています。学校運営協議会では、そうしたことや、校区の子どもたちの現状にも目を向け、コロナ禍で仕事や子育てのことで悩んでいる家庭への行政の情報を届ける取組や、「こどもカフェ」や「未来塾」を手掛かりにした子ども支援など、今後の学校・地域デザインに向けた熟議がなされたようです。

熟議の中で出された意見をみてみると、

- 「行けば学べる」「私たちにとっても学習の場」と感じられる宣伝をする。つまり小学生から大人、年配までみんなの『生涯学習の場』として打ち出す。明石市がそれに力を入れてきているが、今二見北では、交流の場としてコミセンでまちづくり協議会が主となって〇〇カフェなどしている。西部文化会館まで行かないとできないというのではなく、わがまちの学校でわがまちの子どもらといっしょに学んでいくのがいい。
- シリーズ化するのも案。はっきりとした看板を打ち出す。期待感を持たせられるような。
- 困っている子や家庭には子ども食堂など福祉や子ども財団、子育て支援の手がもっと届けば。

といった学校のお手伝い的な発想ではなく、子どもの成長を真ん中におき、子どもも大人も育つまちづくりに向けた熟議が行われたのが伝わってきます。二見北コミュニティ・スクールが、二見北コミュニティ・スクールの具体像として掲げる、「地域と学校をつなぐかけはしコミュニティ・スクール」に向けて進みはじめているんだなと感じさせられました。（文責：北本）

地域とつながり子どもが育つ学校行事のデザインを

新型コロナウイルスの影響により、学校行事の意義についてあらためて考える機会となりました。

二見北小学校の音楽発表会の紹介にもありましたが、児童の演奏を聞いた地域の方が、「一人一人の児童がどのような方向でやろうとしていたのか、どういうことに力を入れてやろうとしていたかが伝わってきた。」という感想をもたれていました。もし、新型コロナウイルスの影響もなく、例年通りの音楽会が実施されていたら、このような声はなかったのではないかと考えます。限られた時間、様々な制約の中、子どもたちが表現を通して相手に伝えるということの本質を大切にしたからこそ、演奏の背景にある願いや思いが地域の方に伝わったのではないかと捉えます。もちろん、そこに先生方の適切な指導があったからこそ成し得たことだと想像しています。

このように、これまでの学校行事の形を大切にしながら本質に立ち戻り、リニューアルしていくことは今後の学校行事を創っていく上で大変重要だと考えます。単に演奏や演技を発表するという、成果のみに意識を向けるのではなく、その行事を創り上げる過程にも注力することが学校行事の意義と言えるのではないかと考えます。つまり、行事を創り上げる過程の中で子ども自身が目的意識をもち、思考することで学校行事の質は磨かれると思います。

また、合わせて大切だと感じたことは、二見北小学校が地域の方の声を広く発信されているということです。通信に書かれた地域の方の感想を読んだ子どもはとても嬉しく思うでしょうし、やってよかったという達成感にもつながると思います。さらに、地域の方の感想を広く発信することは、子どもの学びや成長を広く開いていくということにもつながるのではないのでしょうか。地域と学校、家庭が連携していくためには、やはりその真ん中に子どもの姿が不可欠だと考えています。音楽発表会で魅せてくれた6年生の姿を、地域と学校、家庭の3者で称賛できることが大変価値あることだと実感しました。すばらしい子どもの姿、子どもの学びを学校だけでとどめるのではなく、地域や家庭からの声を引き出し、価値づけることにより、当事者意識も高まるのではないのでしょうか。

二見北小学校の音楽発表会の様子を読ませていただき、新しい学校行事の在り方、学校行事がもつ可能性に気付くことができました。今後は、子どもたちが地域の方と協働して学校行事を創り上げるような取組があってもよいのではないかと考えています。限られた時間を最大限活用しながら、「創る」ことに軸を置いて学校行事を形づくっていくことは子どもたちにとっても、地域の方にとっても「ワクワク感」につながるのではないのでしょうか。具体的なアイデアは私自身の想像にとどめますが、地域と学校がつながる絶好の機会としてこれまで存続してきた学校行事を、新しい時代に合わせてリニューアルしていくことは、期待と可能性に満ちていると考えています。（文責：本所）